

南城市立久高中学校 (校長 久貝悦子)

- 「久高人 (くだかんちゅ) に語り継ぐ平和のウムイ」
- 「絵はがき平和メッセージ ～神の島から平和を発信しよう～」

未来の語り部として “久高人のウムイ” “沖縄の心” を伝えてほしい。

(平成27年2月27日：電話取材、4月30日：現地取材ほか)



【実践事例紹介】 宮良孝 教諭 (社会科)

(聞き手：沖縄県平和祈念資料館 古謝将史)

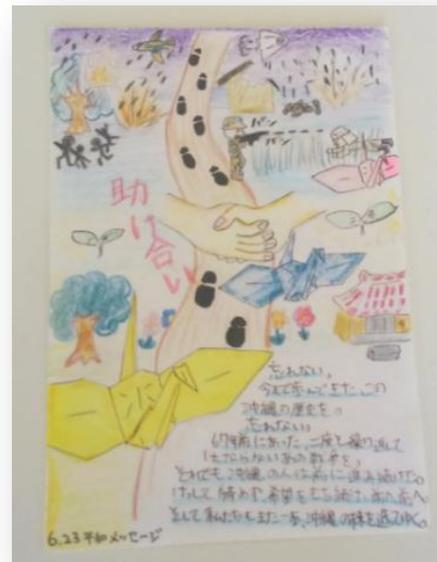
1. 久高中学校における平和学習について

(宮良) 以前、ある先生から「地元のことについて、意外と知らないものだ。」と指摘されたことがある。それ以来、社会科教師として、地域に根ざした学習、地元の人材・素材を活かした授業を展開したいと考えてきた。

久高中学校に赴任した際、高齢者と接する機会が多いと感じた。その時期、沖縄県平和祈念資料館職員に社会科の先輩教師がおり、アドバイスを伺ったところ「子や孫につなぐ平和のウムイ事業」について紹介された。家族内で沖縄戦の体験を語りつぐ手法であれば、高齢者の多い久高島の特色を活かした平和学習で取り組むことができるのではないかと考えた。さっそく現任校に赴任したその年から、生徒たちによる戦争体験証言映像収録活動を行っている。映像証言収録活動は、中学校3年生で取り組んでいる。

絵はがき平和メッセージは、前任校でも行っていた取り組みである。絵はがきメッセージは、全学年での取り組みとしている。6.23慰霊の日の時期に合わせて、生徒たちがイメージした平和についてのイラスト、平和への想いを描いた絵はがきを作成している。2週間ほど、校内にて展示会を開催した後、島外の家族や友人へ送っている。留学センターもあることで、生徒の半分近くは島外・県外の生徒である。生徒には、『久高のウムイ』『沖縄の心』を出身地へ行って広げてほしい」と話をしている。

資料：宮良教諭の前任校で生徒が作成した絵はがき
「忘れない。今まで歩んできた、この沖縄の歴史を。
忘れない。67年前にあった、二度と繰り返してはならないあの戦争を。それでも、沖縄の人は前に進み続けた。けっして諦めず、希望をもち続けた。そして、私たちもまた一歩、沖縄の未来を造ってゆく。6.23平和メッセージ」
絵はがきには、イメージイラストとメッセージが綴られている。



2. 年度最初の平和学習ガイダンス

平成27年4月30日(木)、久高中学校にて、宮良先生による社会科の授業(3年生)取材した。内容は、沖縄戦の概要説明のほか、今年度の平和学習についての取り組みの説明であった。

以下、授業前半部分を略案形式で、授業後半部分はレポート形式で紹介する。



【授業前半】

(指導概要) 平成27年4月30日(木) 実施 中学校3年生 社会科(歴史的分野)(50分) ○本時の内容 : 発展「沖縄が、なぜ戦争にまきこまれたのだろうか？」 使用教科書及びページ : 帝国書院「中学生の歴史 初訂版」p211	
時間	○ : 主な内容・発問 ⇨ : 着眼点 T: 教師 S: 生徒
導入 5分	※黙想1分間 前時振り返り (前時の終末時に、次時への課題として発問していた。) OT: 「なぜ、人々は、正しい戦争と信じて、貧しい生活に耐えていたのか？」 S: 「強い国にするため。」 S: 「『お国の為に』と教えられていたから。」 S: 「国のため。天皇のため。」 「負けていたのに、勝っていたと報告していたから。」 ⇨ ノーチャイムながら、時間通り生徒の号令により「黙想」から授業が始まった。
展開I 25分	OT: 「この写真を見て、何か気付いたことはありますか？」 ⇒ 対馬丸関連の資料提示 S: 「飢えている。」 S: 「漂流している。」 S: 「戦争を生き抜いた。」 ⇨ 学童疎開、アメリカ軍による攻撃など OT: 「沖縄が、なぜ戦争にまきこまれたのだろうか」 ⇒ 沖縄戦関連ビデオ5分程度観賞 ⇨ WWI時の大戦景気、世界恐慌、満州(満州は日本の生命線) T: 「沖縄が戦争に巻き込まれた原因について、3択で考えてみよう。」 ⇨ 3択の提示だが、実際には、すべて当てはまる。 生徒は、3択の何れかひとつに回答を絞ろうとしていたが、その過程で思考の練り直しが行われている姿が見られた。 ⇒ 沖縄戦関連ビデオ8分程度観賞(学徒隊、平和の礎関係)



本時の前半部分で、沖縄戦の概要を取り扱っている。宮良教諭からは、島の沖縄戦体験者の証言も紹介しながら、沖縄戦の歴史的教訓を学ぶ意義や伝える意義を生徒に伝えていた。3年生のおよそ半数が島外・県外出身者ということもあり、沖縄戦の実相をしっかりと学ぶことや、出身地に帰った後で「久高のウムイ、沖縄の心」を自ら発信してほしいと、宮良教諭が強く語っていたのが印象的であった。



【授業後半】

宮良教諭より、ふたつの平和学習の課題について資料の配布と説明を行った。

絵はがき平和メッセージ
～神の島から平和を発信しよう～

「絵はがき平和メッセージ」に関しては、3年生にとっては、過去二カ年で経験済みなので、その提出時期のみの説明であった。

久高島の戦争体験者（オジー、オバー）からの戦争体験証言聞き込みなどで学んだ知識や感想を絵やメッセージにして、島外にいる家族や友達など多くの人々の心に、久高島の平和メッセージを届けることが目的であることを、配布資料にて確認している。絵はがきに使用する葉書は、教材費にて購入済み。

（資料：久高中平和インタビュー用紙※一部掲載）

久高中平和インタビュー用紙

インタビュー者 【interviewer】	名前			
役割	インタビュー者（聞き手）	写真・ビデオ撮影	記録	
インタビュー日	インタビューの時間	インタビューの場所		
インタビュー者の履歴など				
なまえ	生年月日	現在の年齢	当時の年齢	
住所	出身地	職名		
戦時中の家族構成				
曾祖父、曾祖母、祖父、祖母、	父、母、			

※下の例を参考に沖縄戦と家族の家系図を作成する

久高人（くだかんちゅ）に語り継ぐ平和のウムイ事業

3年生7名のうち3名が、島内出身者。そのうち、沖縄戦体験者が家族にいる生徒は2名となっている。宮良教諭は、その2名を軸に、2グループに分けて調査活動、証言映像収録活動を行うことを説明。

※配布資料より抜粋

☆期間：5月中旬～6月中旬（約一カ月）

☆調査活動：水曜日と金曜日の放課後 ☞ 水曜日と金曜日は、部活動がない為、他の自主的な活動で活用が可能。

☆調査方法：① 事前に、久高のオジー、オバーにアポイントメントを取る。
② 各グループの聞き込み調査は、放課後を活用する。
③ 事前に聞いてみたいことを、グループで三つ決める。

☆役割分担：① 記録（内容を記録する）
② 写真（インタビューを撮る） ※昨年度提供されたタブレット端末を活用予定
③ インタビュアー（司会・聞き手など）

宮良教諭の説明の中でとくに印象に残ったのは、アポイントメント取る際の注意事項について、過去の事例を振り返りながら生徒に論しながら語った内容である。

（宮良教諭から生徒へ）「オジー、オバーが戦争の話をするときって、どんな様子だった？涙を流しながら話をするオバーもいたさ。やっぱり、思い出したくないことさ。以前のインタビューで、涙ながらに話をしてくれたオバーに、『おばあさん、すみません。こんなに嫌な事を思い出させて、すみません。』と謝ったら、『先生、いいよ、気にしないでよ。未来のために、子どもたちに、しっかりと勉強させてよ。』と言ってくれたさ。

(前ページつづき)

だから、みんなが、ただ『オーバー、戦争の時のこと、教えてー』と、軽くは頼めないさ。心から『自分たちも、沖縄戦のこと調べてみたいから、いくつか質問していいねー』みたいに、オーバーの気持ちを考えてインタビューしてよ。そうしたら、オーバーも話しやすいさ。」

戦争体験者からの証言を収録する際に気をつけなければならないことは、戦争トラウマを刺激して、フラッシュバックや不眠などを引き起こさないように配慮することだとも言われる。宮良教諭も、自らの経験を通して、生徒たちに配慮すべき事をしっかりと伝えていた。

3. 平和学習へのウムイ、コーディネーターとしての教師の役割

(宮良) 教員採用を目指している頃、平成16年度に沖縄県平和祈念資料館で「平和ガイドボランティア養成講座」が開催されると知り、当時の担当者に頼み込んで参加させてもらった。南風原中学校に採用された際、戦跡である旧陸軍病院壕を軸にした平和学習が出来るのではないかと思案した。職場の後輩が先年実践していた生徒による「旧海軍司令部壕跡平和ボランティアガイド」の資料を取り寄せたり、隣接する南風原文化センターの学芸員の協力を打診したりした。その後、総合的な学習の時間を活用した平和学習「平和ガイド」を立ち上げた。教師の側がひとりで何かするよりも、コーディネートしていくことで新たな学びができると考えている。

教師の側がすることは(コーディネートを通して)生徒たちに、何らかのきっかけを与えることなのではないかと考えている。

教師の側が時間を提供し、専門家がスキルを提供する。

(以上)

「沖縄戦平和学習」今後のシェアリングのために
実践事例 No.3 【 南城市立久高中学校 】 編

地域に根ざした平和学習を創造する。

～ 地域の「戦争記憶」をどう保存し、継承するか～

宮良教諭の実践は、地域に根ざした平和学習のあり方について示唆を与えるものである。地域素材、地域人材を活用するためには、教師側によるコーディネートが必要であると同時に有効であることも、自身のこれまでの事例を通して紹介していただいた。

当資料館における「子や孫につなぐ平和のウムイ事業」を参考に、久高中学校で「久高人(くだかんちゅ)に語り継ぐ平和のウムイ事業」を立ち上げて3年目。これまでに収録した証言映像は、生徒本人と証言者に送っているとのこと。課題は、担当職員の離任等により証言映像資料が活用できなくなる。当館から、久高島内の公的機関が資料館等にて保管し、閲覧ができるようにすることを提案。収録した「戦争記憶」を、久高島の歴史を語る共有財産として保存・継承する方策を、今後、学校、地域で検討していただければ幸いである。久貝悦子校長先生、宮良孝先生のご協力に感謝します。

☆ シェアリングにおける視点 ☆

- 地域に根ざした平和学習のあり方
- コーディネートによる新たな学びの創造